

行動障害と愛着をめぐる葛藤

小林隆児

青年期臨床で「行為障害」が、発達障害臨床では「行動障害」が大きな問題となっている。これらの行動がわれわれを非常に困惑させるのは、その動因が不可解なためによるところが大きい。これらの行動の一般的傾向として、衝動的、攻撃的、破壊的、予測困難性などが指摘できようか。

これまで児童青年精神医学は、この種の行動障害ないしは行為障害に対してあまりにも無力であったといわざるをえない。それはなぜなのであろうか。行動障害の原因を安易に脳障害と短絡的に関連づけようとする動向が一方ではみられるが、それは治療論を抜きにした悲観論でしかない。

精神医学は、医学の一分野として他分野とともにこれまで要素還元主義を旗印にして、精神障害の原因を個体内に見出すべく懸命に努力してきた。しかし、依然としてほとんどの精神障害の原因は不明で、原因に迫る治療論は皆無に等しい。

その中で、自閉症は乳幼児期早期に発症が顕在化することから、乳児期から発達を克明に追跡し、介入することができる。したがっ

こばやし・りゅうじ=児童青年精神医学
東海大学教授。著書に「自閉症の研究と展望」東大出版会、「不安の臨床」「自閉症治療のスペクトラム」金剛出版、「自閉症の発達精神病理と治療」岩崎学術出版社など。先ほど「自閉症と行動障害」を執筆・刊行。

てその治療や予防の戦略を立てることのできる数少ない精神障害といってよい。この四半世紀自閉症の臨床に従事する中で、筆者の関心は自閉症の思春期・青年期発達から、次第に乳幼児期早期の治療介入ないし予防的介入へと広がっていった。今日自閉症の早期診断と早期介入は数十年前に比して格段に普及し、治療教育は一般化していった。その影響であろうが、Kannnerの記載したような古典的病像を示す自閉症は軽減し、軽症化を示しているが、その一方で信じられないほどの重症の行動障害を呈する例が医療、福祉現場で大問題となっている。彼らの行動障害の凄まじさは、実際に経験したものでなければ想像できないほどのものであるが、筆者は自傷により失明した例を数例知っているし、失明後に治療を受け持っている例がある。また福祉現場で彼らの行動障害をまともに受けてPTSD状態に至った職員もいる。

乳幼児期の自閉症を関係障害の視点に立って介入していくと、子どもたちが内面に驚くほどに強い愛着欲求を秘めていることが分かってきた。なぜそれが養育者に直接表現されないのか、それを解き明かすことが自閉症の原因究明には不可欠ではないかと考えているが、青年期・成人期自閉症にみられる行動障害においても、治療を通して、彼らは強い愛着欲求を潜在的に抱いていることを痛感させ

られた。

ここで临床上非常に重要かつ示唆に富むのは、彼らが愛着をめぐる強い葛藤状態にあることである。愛着行動は本能行動のひとつとして位置づけられ、生物学的色彩の強い行動であるが、そこにおいて彼らは強い葛藤状態にある。このような葛藤状態にありながら、彼らは社会性の発達、つまりは人間になるべく対人交流を蓄積していくことになる。このような生き様がいかに大変なことかは今では彼らの手記を通してかなり明らかになってきた。

自閉症臨床の大変さは、治療関係が容易に成立しないところにあることは確かであるが、彼らの愛着欲求をなんらかの治療介入によって引き出すことができると、驚くほどに彼らは強い意欲を示して、周囲の働きかけを取り

◇書評エッセンス◇

自閉症の発達精神病理と治療

小林隆児著

著者小林隆児氏は、自閉症の臨床および研究ひとすじに20年余の期間専念してこられた精神科医師で、今我が国を代表する自閉症の専門家である。また著者は1992年に彼自身が経験した201例の自閉症を長期にわたり治療し観察した結果を、Journal of Autism and Developmental Disorders に発表し、世界の自閉症研究者に大きな学問的衝撃を与えた。それ以来国際学会の自閉症のセッションや諸外国の研究論文報告では、自

入れ、彼らなりの懸命な生き様を見せてくれるようになる。その変容過程を緻密に観察していくと、これまで明らかにされてきた自閉症に関する知見はことごとく覆されていく思いがする。

愛着を巡る葛藤が自閉症において決定的とも思われるほどに重要な意味を持っている。この種の葛藤をいかにして緩和していくか、その治療の工夫は、自閉症や子どもの他の精神障害のみならず、青年期、成人期の精神障害の治療においても共通する多くの示唆を含んでいる。精神障害の心的葛藤の起源をみる思いである。臨床精神医学と脳科学の接点を探る意味で、発達と精神病理をつなぐ自閉症の臨床は今後多くの知見をもたらしてくれるという予感がしてならない。

閉症研究の最高峰 Rutter 教授をはじめとして皆が必ず Kobayashi の論文を言及および引用するようになった。こうして Kobayashi の名は国際的に揺るぎないものとなったのである。それらを契機に臨床活動はより一段と飛躍して開花し、従来よりエネルギッシュな著者の活動歴のなかでも現在最も精力的な臨床研究活動を行なっている。

本書はこのような軌跡をたどってきた著者の自閉症研究の結晶ともいべきモノグラフである。書物は誰が書いたかも大切だが、私としては何が書かれているかの方にずっと重点をおいている。書評を依頼された場合は内容を出来

るだけ紹介することに努めている。しかし今回は例外である。本書は小林隆児氏によるモノグラフであることが大変重要であるので著者の紹介をまず行なった。

1986年パリで行なわれた国際児童青年精神医学会で、ある幼児自閉症の研究者が発表後に、その自閉症児の予後について質問され、それは自分の領域外であるので知らないと答えたことを覚えている。私はその学会場で著者と共に、その発表者の研究者としての態度と臨床家としての態度の差異について話したのを今でも思い出す。(評者・吉田敬子=九州大学医学部精神科■九州精神医学45巻2号)